共立研究

東京基督教大学
共立基督教研究所
〒270-1347
千葉県印西市内野3丁目301-5-3
TEL. 0476 (46) 1137
FAX. 0476 (46) 1292

Vol. Ⅶ No.1 2001年 8月31日

共立基督教研究所は昨年20周年を迎えたが、その名前の直接の由来を横浜山手にあった共立女子聖書学院（1957～1980年）に負うている。その前身は戦前の共立女子神学校、更には偕成伝道女学校へとたどっていくことができる。

2000年4月より2001年3月まで共立基督教研究所の客員研究員をつとめた鈴木正和氏が、その女性伝道者養成のための学校の歴史を掘り起し研究論文にまとめた。以下はその要旨である。

偕成伝道女学校、共立女子神学校、そしてバイブルウーマン
― 失われた姿を求めて ―

鈴木　正和
自由学園教員・中央聖書神学校講師

はじめに

19世紀の世界宣教の幕開けは、クリスチャン女性に新しいチャレンジの場を与えた。それは彼女たちがキリスト教界の中で、伝道者の妻やバイブルウーマン[1]という職制外の地位に甘んじるのではなく、独立の婦人宣教師として異教徒の婦人や子供を教え導く立場である。そして彼女たちの働きに併せて宣教地の現地人のバイブルウーマンが養成されるようになった。

日本におけるバイブルウーマンの養成機関の草分けの一つはThe Women's Union Missionary Society of America for Heathen Lands（米国婦人一致外国伝道協会、以下「WUMS」とする）によって1881年に横浜山手212番地内に開設された偕成伝道女学校、後の共立女子神学校である。WUMSは日本最初の日本人教会である横浜公会の創設に関わり、以来日本基督教会との協力関係にあったものの、あくまでも無教派の福音主義を貫いた宣教団体であった。[2]日本のWUMSは共立ミッションとも呼ばれたが、その伝道部はバイブルウーマンを養成する神学校を中心に、地方に伝道基地を設けて、婦人たちによる婦人たちのための一つの完結したミッションだった。共立ミッションの伝道部の働きは、訪問伝道やバイブルクラス中心から次第に日曜学校、夏季聖書学校、幼稚園などの子供たちを中心とするものになっていった。横浜と10にものぼる地方の伝道基地では、大正期から昭和初期にかけて、多い時で60を越える日曜学校に2600人におよぶ生徒、16の夏季聖書学校に600人の生徒がいた。

1．婦人宣教師とバイブルウーマン

近代のプロテスタント宣教は、1793年ウィリアム・ケアリ（William Carey）のインド伝道に始まった。彼の働きは宣教団体による宣教師派遣の先鞭であり、以来多くの宣教団体が次々と設立されていったが、異国の地での宣教の中心は男性宣教師であり、その夫人は宣教師ではなく宣教師の妻というものであった。宣教師は、現地言語の習得、聖書の翻訳、伝道などの実際的な活動をするのだが、宣教師夫人の主務は家族を養い夫の仕事を支えることであり、宣教師が陽の働きなら夫人は陰の働きであった。

男性宣教師が異国において現地婦人に伝道することは、婦人でしか入れない密室的空間（zenana）の存在もあり困難であった。しかし宣教師夫人たちは、実際に伝道等活動をするだけの余力はなく、婦

目　次

＊偕成伝道女学校、共立女子神学校、そしてバイブルウーマン　―失われた姿を求めて―
＊付録　大貫共立伝道教会　鈴木正和

人宣教師（教師、バイブルウーマン）の派遣が求められるようになった。異教の国、未開の国での福音宣教は冒険に近いものであり、当時の欧米のキリスト教界において単独の婦人宣教師の派遣は考えにくいもので、これがすぐに実行されることはなかった。ましてや未婚の婦人宣教師などは考えられないものであった。キリスト教界の意見が定まらない中で、紆余曲折の後、アメリカの女性のクリスチャンたちは立ち上がり、1861 年 2 月 2 日に婦人宣教師を外国に送る、婦人たちによる婦人たちの無教派の宣教団体であるWUMSをニューヨークに設立した。その後WUMSをモデルとして、次々と婦人宣教団体が設立されていった。実際に宣教地に派遣された婦人宣教師たちの働きは決して目新しい働きではなかったが、それ以前の男性宣教師や宣教師夫人たちよりも系統的に、そして持続的に取り組まれていった。

婦人宣教師たちは、直接現地の人々の中に積極的に入って行き、現地の言語の習得に励み福音を宣べ伝えたが、通訳や、その場に必要なフォローアップをする現地人のバイブルウーマンが必要だった。婦人宣教師たちが積極的に宣教を拡大していくためには、バイブルウーマンの養成が重要となり、バイブルウーマンの養成機関がそれぞれの国のそれぞれのミッションによって次々と設立されていった。

日本のバイブルウーマンの養成機関の草分けは神戸女子神学校（日本組合教会：1880 年）と偕成伝道女学校（WUMS:1881 年）である。しかしWUMSのバイブルウーマンの存在は偕成伝道女学校設立以前の 1874 年に遡り 1877 年にはバイブルウーマンの訓練が始められていた。また横浜のバプテスト派の神学校は 1884 年に開設されるが、それ以前の 1877 年にはすでにバイブルウーマンの養成を始めているのである。

1890年頃迄の初期の日本人のバイブルウーマンは人生経験ある、夫を亡くした女性が多かった。これは世界的傾向であり、身軽に伝道に動くには独身女性より夫を亡くした女性の方が良いということや伝道には人生経験が役立ったためとも考えられる。クリスチャンになった日本の婦人たちは、その喜びを隣人に伝えるために聖書を系統的に学ぶ必要があった。当時の日本において女性の教育は非常に限られており、聖書の一般の学びをすれば、年齢や学歴など関係なく、一人前の信徒伝道者としてどこにでも出ていけるような状況だった。しかし次第に女子の教育環境や社会の情勢が変わり、ミッションスクールや女学校の卒業生が神学校に入学して来るようになると、人生経験を補うに足る 3 年から 4 年の教育課程を持つ聖書の学びと実践訓練をする神学校へと変遷していった。福音の広まりと共に日本のキリスト教界はますますバイブルウーマンを必要とし、供給よりも需要の方が多い時代が続き多くの女子神学校が開設されていった。[3]

2．日本の婦人伝道者養成機関

WUMSの日本への婦人宣教師の派遣は、オランダ改革派宣教師 J. H. バラ（J. H.Ballagh）の要請によるものであった。日米修好通商条約を受けて、1859 年に神奈川が開港され横浜に居留地ができると、そこには「らしゃめん（洋妾）」と呼ばれる日本婦人も多数おり、J. H. バラ等のキリスト教宣教師たちは居留地の道徳律を高めようと試みたが、居留地住民の賛同を得られなかった。J. H. バラは増加する混血児の教育と男尊女卑の因習に囚われている日本女性のために女子教育の必要性を感じ、婦人宣教師の派遣をWUMSに要請した。J. H. バラの要請にこたえてWUMSは 1871（明治 4）年に日本にメリー・P・プライン（Mary P. Pruyn, Mrs.）を代表者として、ルイーズ・H・ピアソン（Louise H. Pierson, Mrs.）、ジュリア・N・クロスビー（Julia Neilson Crosby, Miss）の 3 人の婦人宣教師を派遣した。彼女たちの当初の目的は混血児のための施設を建てることであったが、横浜の状況が想像していたよりも良かったこともあり、1872年には日本最初の女子寄宿舎学校を始め、その後婦人伝道者養成学校、貧民学校、医療伝道などに取組んでいった。それらの働きの中で共立女学校と偕成伝道女学校・共立女子神学校が存続した。WUMSの宣教師が日本で手がけた女子の学校、寄宿学校、混血児のための施設、婦人伝道者の養成、日曜学校などの多くの働きは日本では初めてのことだった。

戦前のWUMSと偕成伝道女学校・共立女子神学校の歴史は 72 年間に及ぶ。それは、ピアソン時代（1871-1899）28 年間、プラット時代（1899-1937）38 年間、日本人校長の時代（1937-1942）6 年間の 3 時代に区分することができる。

3．ピアソンの時代（1871-1899）28 年間

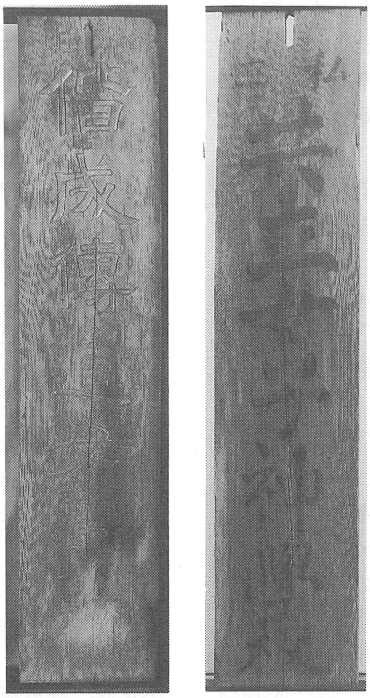
ピアソンらWUMSの 3 人の婦人宣教師は 1871（明治 4）年 に来日して、日本の生活に馴染むとすぐに積極的に伝道を試み、バイブルウーマンの養成を始める。来日 2 年目の 1872 年には、日本における日本人女性の最初の洗礼式があり、その内の一人は彼女たちの生徒であった。プラインらの婦人宣教師の

日々の生活がキリストの証しであり、彼女たちと接する者たちの中から洗礼者が起こされていった。英語を学びに来ていた者、料理人、通訳、執事であった若者がクリスチャンになっていった。福音を伝えずには学校を訪れた者は外へ誰も出さないというほどに彼女たちのミッション・ホームは伝道の熱情で満ちていた。その様子はピアソンのもとにいた弾正台（太政官）所属の諜者であった桃江正吉（本名正木護）の報告書などに詳しい。

WUMS の宣教師たちはバイブルウーマンの養成に着手するのは少なくとも 1874 年以前であることが、プライン等の箱根への旅行記から伺い知られる。バイブルウーマンの養成所と女学校は同じ敷地内にあり、女学校は「本科」または「普通部」、偕成伝道女学校が開設される以前のバイブルウーマンの養成所は「バイブルハウス」もしくは「伝道部」と呼ばれていた。

偕成伝道女学校（1881年-1906年）

それまでは休暇中と週末にのみに伝道とバイブルウーマンの養成をしていたピアソンだが、偕成伝道女学校を始めると毎朝バイブルウーマンを集めて礼拝をし、それから聖書クラスを持ち、その後バイブルウーマンたちは市内や郊外へ出ていって、福音のまだ伝わっていない家を訪問した。彼女たちの中には寄宿する者や通学する者がいて、各自、またはピアソンの助手となって伝道をした。



偕成伝道女学校の門標（左）と、その裏に記された共立女子神学校の門標（右）

この偕成伝道女学校には、年齢制限、卒業規定、修学年限はなく、私塾的ではあるが、正式な給費制度のある、聖書研究とキリスト教伝道の実践を学ぶ専門の学校で、神学生は１年から３年で修業証明書を与えられ伝道に出て行った。偕成伝道女学校は、バイブルウーマンの養成所およびセンターの役目をしていて、彼女たちが学びながら伝道し、伝道しながら学ぶ所だった。

ピアソンは伝道の働きに専心するため共立女学校校長を辞任したい旨を申し出ていたが、適任者がいないためにしばらく両校兼務ということになった。偕成伝道女学校はピアソンの個人的なものではなく、宣教師団の協力のもとにあり、クロスビーなどは栃木県小俣に応援伝道に出かけている。しかしピアソンの人柄、伝道への熱い思いが、偕成伝道女学校を作らせ、伝道基地の設置へと伝道の働きを推し進めていったことは確かである。

ピアソンは、1891（明治24）年に共立女学校をブルックハート（Harriet I. Bruckhart）に委ねて偕成伝道女学校に専念する。彼女はそれまで以上にバイブルウーマンの養成と直接伝道に力を注ぐ。そして神学生やバイブルウーマンの数も増え、次第に偕成伝道女学校や伝道部の働きも充実していった。その勢いは次第に共立女学校を凌ぐものなり、1890 年代には偕成伝道女学校は共立女学校の生徒数よりも多くの神学生を有するようになった。

バイブルウーマンたちは宣教師の助手として、戸別訪問、路傍伝道をし、伝道旅行にも同行した。また自分たちだけでもホームを拠点に戸別訪問、路傍伝道、定期的に集会を持っている場所の訪問に励んだ。彼女たちは、必ず２人一組になって毎週午後２回出かけていった。バイブルウーマンが定期的な戸別訪問をして、整然とした教え方をすることによって、多くのクリスチャンをキリストへのより深い信仰と知識へと導くことができると考えていた。

ピアソンはバイブルウーマンを同伴してしばしば箱根で休暇を過ごしたが、それは休養のためだけではなく伝道旅行でもあった。彼女は折りを見ては旅行し遠方にも足を運んだ。これらの伝道旅行は伝道基地を見極める旅でもあった。1886年にはバイブルウーマンの地方派遣が始まり最初の２人の婦人が派遣された。いざ伝道基地が設置されると２人一組の常駐（もしくは３ヵ月交代）のバイブルウーマンが派遣され、神学校の教師たちが巡回して彼女たちを支援した。巡回する時にはしばしば特別伝道集会が催された。次第にバイブルウーマンの働きが認められるようになると横浜以外の土地からもバイブルウーマンの派遣が要請されるようになった。

ピアソンは年齢と共に体力的には衰えていったが、東奔西走の伝道生活を続け、バイブルウーマンを伴っての伝道活動を辞める気配はなかった。彼女は 1871 年の来日以来一度も母国アメリカの土を踏

共立女子神學校　横濱市山手二〇九番
目的は婦人傳道者の養成▲修業年限三箇年▲使命を感ずる滿十八歳以上の婦人に準備を與ふ▲新學年開始九月卅日▲規則書は二錢劵を要ず

『基督教新聞』
1909年 5月1日

まず、休んだのは日本に来てからの30年間で天然痘にかかった12日間だけだったという。彼女は平均して週に5、6回伝道に出かけたと言われ、まさに日本の宣教に生命を燃やし続けた。1899年には長年の友人であり支援者であるスターン博士は、彼が援助を止めない限りピアソンが働き続けると考えて、彼女の健康のために援助を停止したほどであった。ピアソンはまさに死ぬまで日本の福音宣教のために働き続けたのである。

プラット（Susan A. Pratt, Miss）が1892（明治25）年に来日して校長の補佐となりピアソンを助けたが、最後の最後までピアソンは精力的に伝道活動を続けた。そして1899（明治32）年にピアソンは召天し、プラットが校長に就任する。ちょうどこの頃、指導者のみでなくバイブルウーマンも世代交代の時を迎えていた。

プラットの伝道に対するスピリットはピアソンのものと決して劣らず、偕成伝道女学校の福音宣教のバトンは、スムーズにピアソンからプラットに手渡された。プラットにはハンド（Julia E. Hand, Miss）（1900年から1907年まで）、アルワード（Clara Alward, Miss）（1907年から1918年）、リン（Hazel B. Lynn, Mrs.）（1921年から1941年まで）という良い補佐が与えられた。

4．プラットの時代（1899-1937）38年間

共立女子神学校（1907-1943）

1900（明治33）年に、プラットは偕成伝道女学校の学制や組織を改め、私塾的な学校から、3年または4年で卒業できる教科課程の整った神学校に改編する。彼女は、神学校を車輪の車軸、それぞれの伝道の働きを車輪のスポークと考え、神学校での学び、横浜での実地訓練、地方の伝道基地を整備して、開拓伝道、伝道旅行など、神学校を中心とした一つの宣教ミッションとして系統的な組織を確立する。1907年には校名は共立女子神学校に改められた。

Susan A. Pratt
黒木あい氏所蔵

共立ミッション伝道部の働きは戸別訪問、聖書研究会、工場や施設を訪問して、聖書研究会や日曜学校を持つことであった。その対象は家庭の主婦、娘、子供、幼児、女性工員、病院の看護婦、刑務所の女性囚人、感化院の少女、孤児院の孤児とまさに女性と子供たちに関わるさまざまな分野で伝道活動を展開していった。

学びと訓練

神学生たちは、聖書の学びと共に訪問伝道などの実際的な訓練を受け、正規の聖書研究と同時に教会の奉仕活動、他に週に2回の宣教活動や卒業前の4ヶ月の実地伝道訓練期間があった。

教科では聖書の学びが最重要だったが、他に日本文学と作文、漢文、中国史、音楽、裁縫と礼儀なども教えていた。聖書全巻をカバーして聖書が系統的に教えられた。個人伝道法、日曜学校、聖書解説と福音説教、「エレミヤの祈りの生活」、「イザヤにおけるキリスト」、「神の言葉の力」、「ペテロの幻からの学び」、「クリスチャンの影響」などの授業もあった。他に児童心理学、キンダーガーデン科、社会事業視察の時間なども設けられていった。教科課程は時代と共に変化していき、チャペルの後で聖書の勉強をし予習した箇所の討論などがなされることもあった。

神学生は、実地訓練として、学期中は横浜の近隣で奉仕し、横浜の四つの教会の通常の礼拝、日曜学校、婦人集会、訪問伝道などをした。また刑務所、感化院、慈善病院、孤児院、慈善学校、工場で日曜学校を展開した。その中で、特に日曜学校、保育園・幼稚園などが共立ミッションの特徴となっていった。

プラットがピアソンから偕成伝道女学校を受け継いだ時には、直属の六つの伝道基地があった。

神学生

さまざまな背景のクリスチャン女性が神学校の門を叩いた。年配者もいれば比較的若い婦人もいた。1903年頃の神学校は、ピアソンの訓練を受けた「お年寄組」と「若い人」の2種類の生徒がいたが、その「お年寄組」は、バイブルハウス時代からのバイブルウーマンたちで十数人の夫を亡くした年配の女性たち

□目的＝婦人傳道者、聖書科教師の養成
□入學資格＝高女卒業又は特別傳道者としての賜を有する十八歳以上の者
□入學願書＝牧師の薦書及醫師の證明書添附を要す
共立女子神學校　横濱市中區山手町二〇九
□修業年限＝四ヶ年
□入學期＝毎年四月初旬なれども臨時補欠入學を許すことあるべし
□規則書＝郵劵二錢封入申込まるべし

『基督教年鑑』
1934年

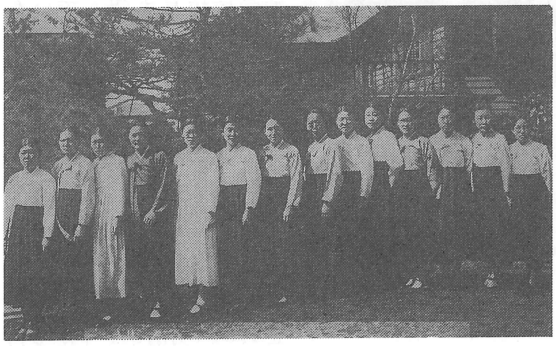
卒業生とワーカー（25周年紀年で）、1925年6月23日
共立基督教研究所所蔵

だった。普段彼女たちは、学校所属の講義所で実地伝道に当っていて、時々休暇で寄宿舎に戻ってきては「若い人」と一緒に寄宿舎に住んだ。

すべての神学生が家族の承諾を得て神学校へ来たのではなく、両親や親戚の反対を押し切って来た者、両親が信者でない金持ちの男性と結婚させようとしてそれを振り切ってやって来た者などもいた。神学生の中には既に牧師と結婚している牧師夫人、他の宣教団体から派遣された者もいた。独自の教育機関を持たない宣教団体にとって、共立女子神学校は福音主義、無教派であったのでメリットが多く、また共立女子神学校にとっても月謝の心配のいらない神学生を受け入れることはメリットであった。また次第に公立の学校の教師や看護婦など学歴や能力の高い婦人たちも入学するようになり、時代と共に学生の質が向上していった。

留学生

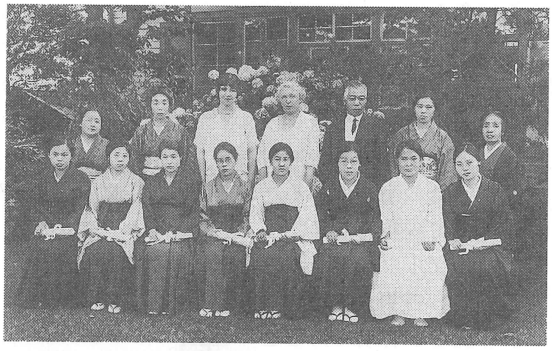
1919年第17回卒業の金信喜が最初の朝鮮からの留学生である。次第に外地からの留学生の存在が共立神学校内で多くなっていった。1922年度の16人の新入生は、日本各地、台湾、朝鮮、満州からやって来た。1940年第37回卒業生16人中に外地出身の留学生はその半数の8人である。これらの人々の中には、動乱の朝鮮半島で殉教した金慶淳（1936年第33回卒業）、金淳好（1938年第35回卒業）、白仁淑（1939年第36回卒業）、韓義貞（1940年第37回卒業）がいる。また韓国の伊譜善大統領夫人の孔得貴は1940年第37回卒業生である。平沼の工場には、朝鮮から多くの女性工員が来ており、そこで朝鮮からの留学生の働きが始められていった。そして日本語が堪能になるとその留学生に他の働きが加えられていった。



横浜共立女子神学校、朝鮮からの留学生 ←同、1939年4月12日
共立基督教研究所所蔵

卒業後の進路

卒業後は、WUMS直属の伝道基地に派遣されるか、他の地方の弱い教会を助けるか、自分の家に戻って働いたりしていたが、次第に日本各地そして外地からも派遣要請されるようになっていった。中には神学校に教師として残る者もいた。卒業後の進路は次第に変化し多様化していき、教会や伝道基地だけではなく、ミッションスクール、聾唖学校、神戸のスラムなどで働く者も現れた。進路先を大別すると、（1）共立ミッションの地方伝道基地で働く者、（2）他のキリスト教関係の施設で宣教師や日本人教職者と共に働く者、（3）家庭に入りクリスチャンホームの建設に従事する者であった。共立女子神学校出の働き手の要望が多かったという。



1927年、第25回卒業（卒業生、教師、プラット、リン）
共立基督教研究所所蔵

神学校と女学校

WUMSの教育的働きは、最初は共立女学校が中心であり、初期のバイブルウーマンたちは共立女学校に仮住まいしているような感があったが、偕成伝道女学校ができて、寄宿舎、チャペル、教室が整備されていくと、神学生の数が女学生の数を凌駕するようになった。神学校と女学校は、同じ敷地内にある一つの共立ミッションではあったが、次第に心理的な距離が生じていった。女学校から直接神学校に進むものもそれほど多くなかった。そんな中で二つの学校の新しい関係が模索されていた。

5．地方の伝道基地とバイブルウーマン

WUMSが地方に伝道基地を作って伝道することを始めたのは1886年に遡ることができる。伝道基地は、その地方のクリスチャンの要請や伝道旅行での視察の結果決められたようである。通いで日曜学校を始め、それを足場に定期的な働き場として開所することもあった。地方の伝道基地は、周辺に教会がないか信者もしくは支持者が近くにいる農漁村が選ばれたようである。神学生たちは夏季休暇の際には横浜に滞在して学期中からの働きを維持する者と地方の伝道基地を助けに行く者や実家に帰ってそこで伝道する者がいた。実家での働きから伝道基地が開設されたこともあった。伝道基地の新設、日曜学校やバイブルクラスの新設は卒業生の数に応じていて、卒業生が多ければそれだけ新しい働きが可能となった。

川和の農繁期託児所
共立基督教研究所所蔵

伝道基地ではバイブルウーマンたちが大人や子供たちの集会やクラスを持つために近隣の村々へ出かけて行ったり、求道者が毎日講義所にやって来たりしていた。バイブルウーマンは日曜学校、工場での女性工員のための聖書クラス、裁縫学校、幼稚園の働きなどさまざまな伝道活動をした。バイブルウーマンは独自の働きをするだけでなく、近隣の教職者に定期的に説教を依頼することもあり、そのお礼としてバイブルウーマンが婦人と子供たちを対象とした働きをして男性の教職者を助けることもあった。子供の働きが有効であると理解されると、地方の伝道基地での働きの中心は次第に子供中心の伝道へと移行していった。

1937年、第34回卒業（卒業生、教師、理事、プラット、リン）
共立基督教研究所所蔵

バイブルウーマンは毎月報告書を出すことになっており、神学校は伝道基地の様子を常に把握し、宣教師と日本人教師が巡回して相談を受けた。バイブルウーマンは年に一度の神学校での研修会に参加して貴重な交わりと情報交換の時を持った。神学生やバイブルウーマンは、さまざまな所で仏教の僧侶などにより迫害を受けることもあり、神学校を卒業したバイブルウーマンを地方の伝道基地に送り出すことは、うれしいことだが同時に不安なことでもあった。

WUMSの伝道基地は平均して7から9ヵ所であったが、その中で伝道教会や自立教会として発展していったものや中止されたものなど発展形態はさまざまであった。それぞれの伝道基地では自立への努力がなされ、土地の購入、会堂建築のための貯金などが試みられた。だが伝道基地の中で、ミッションからのサポートが切れ、日本基督教会から日本基督教団へ加入して戦後まで継続されたものは、（1）日本基督教団春日部教会、（2）日本基督教会古河伝道所、（3）日本基督教団川和教会、（4）日本基督教団大貫教会、（5）日本基督教会岩本教会、（6）日本基督教団大宮共立教会、（7）日本基督教団富士教会の7教会と思われる。久喜、小俣、保土ヶ谷、小机、鶴見、藤沢などでの働きは継続されなかった。地方基地が教会に発展し伝道が継続されるには、（1）同じバイブルウーマンが長期間留まること、（2）会堂を持つこと、（3）自立に足るだけの献金などが必要であり、いくら日曜学校が盛んでも伝道基地が存続することは困難だった。

6．日本人校長の時代（1937-1943）6年間

この時代は、日本にとっても共立神学校にとっても苦難の時代であった。1937（昭和12）年にプラットは校長を辞し隠退し帰米する。アメリカのミッション本部は、日本人の女性の神学校校長を望んでいたが、神学校の城戸順は伝道基地の責任もあって校長は無理であり、共立女学校でさえ適当な婦人を校長として見つけらなかったこともあり、女性の神学校校長を諦めざるをえなかった。そして共立女子神学校の教授を1904（明治37）年から務め、神学校のことを良く知っていた毛利官治（指路教会牧師）が三代目の校長に選ばれ、1937（昭和12）

年に就任する。だが、その後毛利官治は病を得て病気療養中だったが1940（昭和15）年に召天したため、1922（大正11）年から神学校の講師・教授を務めていた松尾造酒蔵（鎌倉雪ノ下教会牧師）が四代目の校長に就任する。この松尾造酒蔵が共立女子神学校の最後の校長となる

1937年のプラットが隠退し毛利官次が校長に就任した年に日中戦争が勃発し東洋の風雲は急を告げていた。これは校長が外国人の婦人宣教師から日本人の男性牧師に変わったというだけでなく、神学校が内外の危機的な状況に直面することを意味していた。また日本基督教団の設立ともあいまって、共立ミッションはアメリカのミッション本部からの自立の道を模索せねばならなかった。

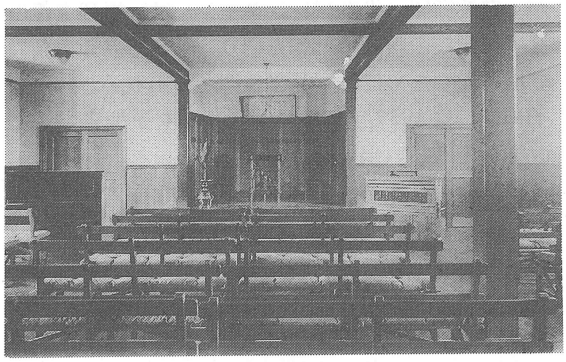
その中で出てきた案件が、（1）女学校による神学校の併合、（2）神学校の合同と東京移転である。宣教師団もアメリカのミッション本部もこれらの動きに反対であり、太平洋の上をさまざまなやり取りがあり、両案ともミッション本部の反対に遭い回避される。

神学校の合同移転案に対してミッション本部は以下のような指示をした。

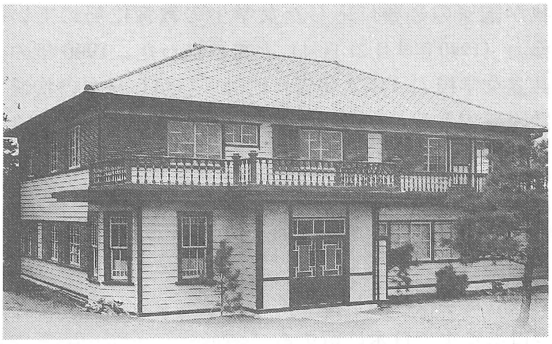
> 神学校が東京に移転せず、横浜での学校の存続のための如何なる変更も認めるという動議が採択された。…神学校の目的は婦人をして聖書を教え、神の言葉を広めることであるが、生き延びる術として、速記、タイプ、幼児教育の課程を開設したり、神学校付属の幼稚園の開設も異議はない。それは神学校のサポートに対する僅かな収入をもたらすかもしれないし幼い子供たちを福音を教える術となるかもしれない。…この困難な先の見えない時代に、山手212番の全ての働きと働き人のために最大の祈りをする。日々主が支え導いて下さるように！（1940年11月17日付）

共立女学校と戦争

共立女学校は、定員の大幅増でミッション本部からの独立と日本人による学校運営を軌道に乗せようと最大限の努力をしていた。しかし宣教師団およびアメリカのミッション本部は、生徒数の増加は学校の存在意義であるキリスト教の伝道の障害となると考え、学校の規模を拡張するという日本人教師等の考えには反対であった。戦局は緊張感が高まり、日本の軍国主義の圧力の中で宣教師と日本人教師の間はにわかに微妙なものになっていく。キリスト教を取るか学校の存続を取るか、二つの陣営はしのぎを削ることになる。



共立女子神学校　礼拝堂
黒木あい氏所蔵



共立女子神学校　寄宿舎
黒木あい氏所蔵

ミッション本部のホージャー（Hoeger, Mrs.）は、共立女学校の笹尾校長に手紙を送り、学校運営上の幾つかの変更は赦すが、学校の目的、すなわち「共立女学校の生徒が救い主であるイエス・キリストと個人的に出会うこと」は変えてはならないことを強調し、この目的のためにクリスチャンの標準を保ち、主日に学校内での不必要な勤労奉仕などを禁じた（1940年2月26日付）。また女学校に付属の教会を設立しようとする試みもあったが、それは日本基督教会内で拒否され実現されることはなかった。

また共立女学校は、それまでの伝統の寄宿舎制度も廃止する。これに対し笹尾校長は、学校の規模の拡大は政府の指導であって、そのための寄宿舎の廃止は避けがたいものであるとした。そして時代と共に笹尾校長の生徒への話も政治的なものとなり戦争について語られることが多くなっていった。宣教師団のリンは、女学校と宣教師団との間に生じた亀裂を悲しみつつも、祈りの中にそれを表面には出さない決心をする。

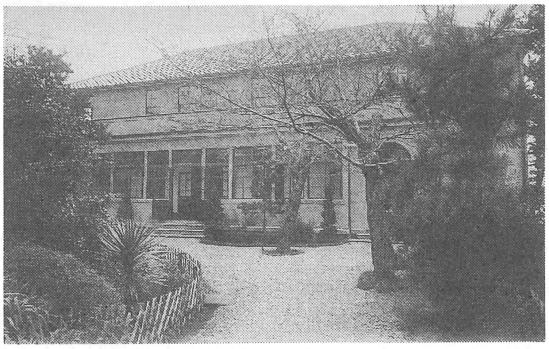
宣教師団からの連絡を受けて、ミッション本部のマスターズ（Clara Masters）は再度、学校の目的はキリストへ生徒を導くことであり、世界的な動乱の時にできるだけ迅速に効果的にイエス・キリストを伝えることを求めている（1940年8月6日付）。笹尾は宣教師団のバレンタイン（Mary Ballantyne）に、「我々は学校の神聖なる伝統を保つことと、同時に

我が国家の必要に応じた女学生の教育に努めている。」（1940年9月21日付）と書き送った。1940年の共立女学校の『年次報告』には「しかし日本の状況は困難である。政府は日本のナショナリズムを支持することを請願し、宣伝の行事を助けるためにさまざまな要求が生徒になされている。時折日曜に国家の祝い事がある。宗教的制限が強まる傾向にある」とある。

共立女学校のバレンタインはあくまで日本に留まる決意でいたが、本部から帰国許可を受け、笹尾の後に共立女学校の校長に就任した神保勝世のすすめもあり、最後の送還船氷川丸で1941年10月23日に帰国の途についた。

そして戦前の最後の宣教師団の『年次報告』はリンの以下の言葉で結ばれる。

> 日本は今まで以上にクリスチャンの影響の全てが必要であり、神が日本を守り日本を神の働きのために用いられることを祈る。(*Annual Report of 1942*, p. 7)



共立女子神学校　新校舎
黒木あい氏所蔵

共立ミッションの経済

共立女子神学校の理事会は1923（大正12）年に組織され、共立女学校の評議委員会は1928（昭和3）年に組織されたが、両校の運営はミッション本部によるものであった。しかし1932（昭和7）年の財団法人横浜共立学園が創立されて両校の維持運営は、その寄付行為において財団法人の理事会の権限下になる。共立女学校は1937（昭和12）年度から経済的独立を果たし、共立女子神学校は独立不可能なために引続きミッション本部のサポートを受ける。財団法人の設立により宣教師と日本人教師、共立女学校と共立女子神学校の力関係に変化が起こる。後に日本基督教団の結成と、政府による、教会と学校の経済的自立の要請のため、すべての重要な役職は日本人が占めることになる。

神学校の経済的自立は伝道基地の経済的自立と直結していた。神学生や地方伝道基地の自立の努力がなされたが、最後までミッションからの援助が大きな支えであった。この緊急事態は神学校と伝道基地の結束ともなった。共立女子神学校は経済的自立の道を模索したが、1938年には神学校は伝道基地を日本基督教会に委任し、伝道基地の補助はあと一年で区切るという方向で動いていた。そして共立女子神学校の廃校に伴って共立ミッションの伝道基地は日本基督教団に組み込まれる。

7．廃校と戦後の再建

宣教師たちが去り、日本とアメリカの戦争が始まった。敵国となった米国のミッション本部からの援助で成り立っていた神学校は、それまでも自立の道を探っていたが、もはや閉校もしくは合同しか存続の道は残されていなかった。松尾校長の選んだ道は、東京に移転し他の女子神学校、すなわち神戸女子神学校（聖和女子学院神学部）、青山学院神学部女子部、東京聖経女学院と合同するというものだった。こうして1943（昭和18）年に共立女子神学校は62年の歴史を閉じ廃校となり、新たに日本女子神学校が誕生する。この学校は1944（昭和19）年、日本基督教女子神学専門学校となり、戦後になって1946（昭和21）年に男子の日本基督教神学専門学校と合同し、それが1948（昭和23）年に閉校し、新たに東京神学大学となるのだった。

戦後WUMSは共立女子神学校の再建を試みる。しかし日本に残された共立女学校周辺にはWUMSと相いれない自由主義神学が強く、戦前と同じように福音主義の神学校を再建することは不可能であった。1951年に共立女学校は完全にミッション本部から独立し、宣教師団が共立神学校の敷地を女学校に提供する代わりに、すぐ向かいの山手221番地の土地を手に入れて、そこに共立女子神学校を再建する。再建された当初、共立女子神学校は日本基督教団との関係を保ち日本基督教団の神学校であったが、宣教師団（代表バレンタイン）は、福音主義の女子神学校の新設へと舵を切り、保守的福音主義の立場を保つために日本基督教団から離れる。共立女子神学校は1957年には名称を共立女子聖書学校と改称して新しい出発をする。

戦前の共立ミッションが建てあげた教会はそのまま日本キリスト教団所属として残ることになる。WUMSは1970年に男性の参加を認めUnited Fellowship for Christian Service（UCFS）と改称するが、1976年にはUCFS自体がBible & Medical Fellowship（BMMF）という他の宣教団体との合併に伴って、共立女子聖書学院は1980年に東京基督教短期大学、東

京基督神学校と合同し、100年に及ぶ婦人伝道者養成機関としての役目を終え、キリスト教の研究機関である、東京キリスト教学園・東京基督教大学附属共立基督教研究所となって発展的に解消する。

おわりに

偕成伝道女学校と共立女子神学校の歴史は、私塾的な聖書訓練学校が正規の神学校になり、バイブルウーマンが信徒ワーカーから婦人伝道師・牧師へ変化し、日曜学校などの子供のための伝道が確立されて行く過程であった。共立ミッションは神学校と地方の伝道基地を中心には発展していたが、宣教師の引き揚げたあとミッションからのサポートの停止によって、共立女子神学校は経済的に自立することができないまま日本の軍国主義化と戦争の混乱の中に最後は廃校の憂き目にあった。それに対して共立女学校は学校規模の拡大によりWUMSからの自立、強いてはWUMSの福音主義からの離脱によって戦火をくぐり抜けて存続した。

「共立神学校、そんな学校もあるのですか」と世の人は今更のようにもう五十年の年月をもつ、古き母校の存在をおどろいたりしますが…母校はこれからまだまだ成長しなければならぬ幾多の欠陥もあり幾多の失敗の跡もある。でもこゝで万事が終わったのではない。もっともっと成長してくれるに違いない、もっと完成されるべく努力をもっている母校である。私共は切に切にこのために祈り願わねばならぬのでございます。…神学校の存在は世人には栄光なくとも神の前には栄光あるものであらしめとうございます。(園田照惠「愛する母校を思う」『横浜共立学園六十年史』p. 350)

これは一人の共立女子神学校の卒業生の言葉である。共立ミッションによって、多くの福音の種が日本の霊的土壌に、特に子供たちのうちに蒔かれた。だが現在ピアソンやプラットらの共立ミッションの婦人宣教師、そして多くのバイブルウーマンたちの働きを記憶する人は少ない。

心に残る二つの情景がある。一つは初めて伝道基地に派遣されるバイブルウーマンたちが祈る姿である。

2週間前の日曜の明け方に女性の一団が祈るために集まり、神の前に自分たちを新たに献身し、その後定まった基地である岩本、小俣、岩瀬に、ほかの者はキリスト教の牧師も教師もいない村落に部屋を取り住むために派遣された。ある所にはその村落にクリスチャンが一人もいない。(*Annual Report of 1903*, p. 17)

バイブルウーマンの不安と期待と信仰、そして神の臨在と導きが感じられる。彼女たちの信仰を覚えたい。

そしてもう一つは、プラットが地方基地（富津、大貫）の訪問を終えて地元のクリスチャンたちと浜辺で別れるシーンである。

この場所を去る時に、男性、女性、子供たちが海岸に集まって日本語で「神ともにいまして」を何度も歌ってくれた。(Susan Augusta Pratt, "Japan Through Friendly Eyes ", *Missionary Link*, Nov. 1961, p. 18)

婦人宣教師と日本人クリスチャン、国籍を越え時代を越え、キリストによってつながれた者たちの絆を覚えたい。

伝うる音信
使いも喜ぶ主は宣り給う
やよ和げ　神に和げと
（共立女子神学校の校歌「貴き務」折り返し）

注

1．バイブルウーマン

バイブルウーマン（Bible Woman）はバイブルリーダー（Bible Reader）と同義語であり、*Oxford English Dictionary* によるとBible Readerは「家から家へ聖書を読むために雇われた婦人」とある。宣教地において、バイブルウーマンは主に現地人の婦人伝道者を指したが、本来はこの言葉に現地人という枠はなくすべての伝道をする婦人またはキリスト教の働きをする婦人を指す言葉であった。今日的な言葉で言えば、クリスチャンのソーシャルワーカーであった。今日の日本では、バイブルウーマンやバイブルリーダーという言葉は聞きなれない言葉である。時代とともに日本においてのバイブルウーマンの働きが、宣教師および日本人牧師の助手から、次第に教会や伝道所の伝道師と変化していったこともあり、ついに定着した日本語訳はできずに、時に応じて「婦人信徒伝道者」、「婦人伝道師」、又は「ワーカー」と使い分けられた。

2．WUMSの特徴：公会主義（無教派主義）と福音主義

初期のWUMSの日本におけるアメリカ・ミッション・ホームの働きは、バラやブラウンを中心とした後に横浜バンドと呼ばれる一団の中核にあり、横浜に住む外国人クリスチャンの霊的ホームの役割をしていた。水曜日の祈祷会には多くの外国人クリスチャンが参加していた。彼らの姿を見て祈祷会を持った日本人たちが霊的回心を体験して日本で最初の教会、即ち横浜公会を設立したのだった。

公会主義を奉ずるJ. H. バラは、「これらの婦人たち（アメリカミッションホームの宣教師）は、日本における全ての分派主義・教派主義は取り除かれる

べきであるという良心的確信で以て行動し、キリストの体の一致は全ての真実なキリストの弟子達に現わされていた。」とWUMSの宣教師について述べている。

しかしルーミス（Henry Loomis）やヘボン（James C. Hepburn）等は、バラやWUMS宣教師たちの日本で公会主義に基づくキリスト教会を形成しようという考えには反対だった。ヘボンは、「わたしどもが長老会を組織し、前述のごとく合同案では働かないと声明するに至った私どもミッションの行動は、当地のある宣教師間に騒ぎを起こしました。特にミセス・プラインの婦人ユニオン・ホームの婦人宣教師らは騒いでいます。このミッション・ホームには、5人の婦人宣教師がおり、そこではバラ氏が絶対信頼されています。これらの婦人宣教師の入れ知恵で日本人のクリスチャンは覚書を作製し、これを英語に訳し当地と江戸にいるあらゆる宗派の宣教師に回送し、宣教師らに教派的な相違を忘れて、日本人の教会に利益のために協力するように、かつまた欧米の宗派や教派名を日本国にもち込まないよう懇請しました。この目的はよいことで、喜ばしい考えではありますが、わたしどもは哀れな弱い人間でありますから、キリスト再臨まではこれは全く妄想的な考えです。」と記している。

またルーミスは、「J.H.バラ師の影響を受けて、この国のキリスト者たちは、独立して『チャーチ・オブ・クライスト』という新しいセクトを形成することを決議しました」（1874年1月22日付）「改革派と婦人一致伝道局の両ミッションを合わせた影響力は、私たちをまことに影の薄いものとしています」（1875年8月21日付の手紙）と記している。

WUMSは組織の上では無教派であったが日本基督教会の協力者であり、1886年（明治19年）には日本基督教会の協力ミッションに加入し東京中会の一員となる。しかしその関係は他の長老派や改革派のミッションとは異なるものであった。

3．女子神学校のリスト

下記のリストの他にも多くの婦人伝道者養成機関があったと考えられる。下記リストには日本基督教会の婦人伝道師養成機関として、偕成伝道女学校・共立女子神学校しか記載していないが、1892年～1899年頃には以下の５つの養成機関が日本基督教会の中にあった。（１）偕成伝道女学校（WUMS：横浜）、（２）聖書学館（北長老派：東京）、（３）ドレナン伝道学校（南長老派：津）、（４）高知婦人伝道者学校（高知）、（５）聖書クラス（改革派：佐賀・長崎）

日本の女子神学校（男女共学を除く）

	校名	所在地	教派	創立年
1	女子聖書学校	神戸	日本組合教会	1880（明治13）年
	神戸女子伝道（神）学校			1908（明治41）年
2	偕成伝道女学校	横浜	日本基督教会	1881（明治14）年
	共立女子神学校			1907（明治40）年
3	聖経女学校	横浜	日本メソジスト教会	1884（明治17）年
	日本女子神学院	東京		1924（大正13）年
	青山学院神学部女子部	東京		1930（昭和 5）年
4	活水女学校神学部	長崎	日本メソジスト	1886（明治19）年
5	ランバス記念伝道女学校	神戸	日本メソジスト	1888（明治21）年
	ランバス女学院	大阪		1921（大正10）年
6	青葉女学院	仙台	聖公会	1890（明治23）年
7	宮城学院バイブルハウス	仙台	日本基督教会	1897（明治30）年
	宮城女学院聖書科（神学部）			1900（明治33）年
8	福音伝道女学校	東京	福音教会	1904（明治37）年
9	女子聖学院神学校	東京	基督教会	1905（明治38）年
１０	東京聖経女学院	東京		1907（明治40）年
１１	東京女子神学専門学校	東京	聖公会	1908（明治42）年
１２	日本バプテスト女子神学院	大阪	バプテスト	1909（明治42）年

主に大正7年『基督教年鑑』（pp. 300-301）、山本菊子『豊かな恵みへ――女性教職の歴史』pp. 27-34を参照

※　研究論文においては、「第１章　偕成伝道女学校・共立女子神学校」と「第２章　大貫共立伝道教会」という構成で、独立した章として論考されていた部分を、紙面の都合上、付録として掲載します。

大貫共立伝道教会

共立ミッションの伝道基地の中から、千葉県富津市内にあった大貫共立伝道教会についてケーススタディを試みる。（大貫共立伝道教会の後身である日本基督教団大貫教会には戦前の記録は一切残されていない。）

大貫の共立伝道教会の起源は1900（明治33）年に偕成伝道女学校の伝道基地が岩瀬地区に設けられたときである。だが、どのような経緯で岩瀬が選ばれたのか、その詳細はわからない。以下の３点が岩瀬へのバイブルウーマンの派遣に関係している可能性がある。（１）キリスト教禁止の高札の立っていた1872（明治５）年４月９日に、上総桜井県下十日市場の名主佐久間帯刀宅を、プラインがJ.H.バラ等と訪問したが、これが婦人宣教師が初めて東京湾を渡った記事であり、この旅行によってWUMSの宣教師たちにとって房総は未知の土地ではなくなる。（２）1892年頃には大貫周辺にスカンジナビアン派によってキリスト教の伝道が開始されている。（３）1897年には木更津の横田にプラットが応援伝道にやって来ている。

大貫共立伝道教会の特徴として以下の６点があげられる。

１．近隣のクリスチャンの共同の教会だった

岩瀬（1900年）に伝道基地が設置されると、そこを中心に伝道が開始され、そして小久保（1903年）、富津（1903年）および周りの村落（1905年）へ伝道が拡大されていった。共立伝道教会は共立神学校の「共立」というよりも近隣のクリスチャンの共立（union）の教会であった。（*Annual Report of 1913*, p. 18）

２．共立ミッション婦人宣教師・婦人伝道師の教会だった

1900年に伝道基地が開設されてから共立女子神学校から次々と卒業生が派遣されて1940年まで続いた。大貫共立伝道教会の長老であった丸藤七夫人の八千代は、プラットによって改編された共立女子神学校の第一回（1902年）の卒業生であり、以来第37回（1940年）卒業生の山口雪江（夫姓高倉）まで継続して40年で20人ほどの共立女子神学校の卒業生が共立伝道教会に派遣された。

３．卒業直後の婦人伝道師が派遣され、よく移動する教会だった

共立伝道教会の婦人伝道者の動向を見ると、多くの場合共立女子神学校卒業直後の若い婦人伝道師が短期間派遣され、その後移動している。このことは共立伝道教会が安定しなかったことを示している。

４．外からの援助に頼る献金の少ない教会だった

大貫伝道教会と他の共立ミッションの教会である岩本伝道教会、粕壁伝道教会、古河伝道所、大宮伝道所との一番特徴的な差は献金額の差である。教会員の数を考慮に入れても、共立伝道教会は他教会よりも極端に献金額が少なく、その差が歴然としている。

５．会堂のない教会だった

1904年からは、会堂のための貯金が始まり、1912年には伝道教会となり、1923年には会堂の土地が提供されるが、関東大震災によって長老の丸藤七の大きな屋敷も倒壊し、その後は会堂建築どころではなくなってしまい、大貫共立伝道教会の伝道基地は何度か借家を移転する。

6．日曜学校の盛んな教会だった

山本秀煌編集『日本基督教会史』の中の1912（大正元）年の日本基督教会の教勢報告では、日曜学校の生徒数の多い教会の中で大貫共立伝道教会が全国3位の213人、1922（大正11）年の教勢報告では2位の283人だった。これらの記事から共立伝道教会は、大正期において全国の日本基督教会の中でも日曜学校の盛んな教会だったことがうかがわれる。

大貫共立伝道教会は教勢がふるわず福音が根づかず発展しなかった要因として（1）献金が少ない、（2）会堂がない、（3）婦人伝道者の移動が多い、（4）会員の転出、（5）関東大震災のダメージ、（6）第二次世界大戦における反米感情とWUMSとの関係が切れたための金銭的サポートの停止、（7）その霊的土壌、（8）教会員の政治参加のための混乱などが考えられる。

大貫共立伝道教会の活動の中心は戸別訪問と聖書クラスから次第に子供の日曜学校や幼稚園（愛児園）の働きに移って行き、この活動は地元によく受け入れられ、また福音宣教にも有益に見えた。共立伝道教会の最後のバイブルウーマンだった山口雪江は「大貫は気候、人情、生活は良いのだが、伝道は困難だった。町の人は教会の雰囲気には惹かれていたようだが、まるで石路に播かれたとしか言いようがない状態だった」という。日曜学校、幼稚園という直接的に信仰、福音受容と関係しない分野では好意的に受け入れるが、それ以上は決して受け入れない土壌が大貫にあった。盛んな日曜学校と幼稚園という子供中心の伝道は結局大貫で実を結ぶことはなかった。

共立女子神学校派遣のバイブルウーマンの離任、そして共立女子神学校の廃校にともない、大貫の共立伝道教会は木更津教会牧師の兼牧となり、1900年以来40年間も続いた共立女子神学校の伝道基地であった共立伝道教会は消滅する。日本基督教会の日本基督教団の加盟とともにその名称から「共立」を外し、日本基督教団大貫教会（第2種教会）となって現在に至る。戦前は現住陪餐が15名ほどであったが現在では会員がわずか2名（キリスト教年鑑編集部編『キリスト教年鑑2001年版』キリスト新聞社2000年、p.155）である。

［編注］

本号掲載論稿中の歴史表記につきましては、現在の基準からすれば不適切と思われる表現もあるかと存じますが、当時の状況説明の必要上、採用いたしましたのでご了承ください。

『共立研究』バックナンバー

Vol. V　No.1 (1999.11)
特集　神学と人文科学
＊新約聖書とギリシア・ローマ古典（小林高徳）
＊神学と人文科学～C.S.ルイスの弁証学における想像力の役割～（井上政己）

Vol. V　No.2 (1999.12)
特集　神学と自然科学
＊「自然の神学」の展開－バネンベルクとポーキングホーン－（稲垣久和）
＊科学の時代の宗教（イアン・バーバー）

Vol. V　No.3 (2000.3)
＊キリスト教信仰と文化－ジョン・H.ヨーダーとH.リチャード・ニーバー－（藤原淳賀）
＊オリエントの文脈に照らした「契約を『結ぶ』行為」（菊地実）

Vol. VI　No.1 (2000.8)
組織神学特別講座　公開シンポジウム
＊“政教分離”をめぐって（稲垣久和）
＊日本における神とキリスト者と社会（佐布正義）
＊教会とキリスト者の「政治的参与」における神学的視座の確立を求めて（三川栄二）
＊「政治」とキリスト者の責任（櫻井圀郎）

Vol. VI　No.2 (2000.12)
＊「心理臨床から見た『人格』」：現代病としての境界例（杉谷乃百合）
＊大学における神学の役割（ポーキングホーン）

Vol. VI　No.3 (2001.3)
＊フィリピンの社会構造とキリスト教：国民統合における植民地的遺制と教会（宮脇聡史）
＊沖縄の民俗と信仰心（櫻井圀郎）

これより以前のバックナンバーは
Vol. V No.1 (1999.11)　掲載のリスト、またはホームページ
http://www.tci.ac.jp/~library/kyouritubullitin.htm
をご覧ください。　各号100円にて頒布中です。

＊「共立研究」は年3回発行、定期購読は年間500円（郵送料含）です。講読ご希望の方は、研究所までご連絡下さい。

共立基督教研究所
共　立　研　究
発行人　稲垣久和
編集人　渡邉彰子